

九州の里海づくりの現在

九州地方環境事務所 里海づくり推進専門官

神松 幸弘

1. 長くて多様な九州の沿岸海域

九州は北海道のおよそ半分弱の面積でありながら、周囲を取り囲む海岸線の長さ(10,182km)は、北海道の倍以上もあり、全国の約3割近くを占めている。九州の海岸線が長い理由の一つは島数の多さ(全国1位は長崎県、3位は鹿児島県)を上げることができる。大小の島々は向かい合う九州本島と相まって、外海と内海を閉ざし、あるいは緩やかにつながることによって潮流の強弱や向きを複雑なものにしている。潮流の条件と河川から供給される泥砂の粒径の違いから、各地の沿岸は海浜、干潟、海草・藻場、岩礁帯といった異なる景観を生み出す。さらに、西北の対馬海流、南の日本海流、東の日向灘から瀬戸内海へと至るそれぞれの海流は、沿岸地形や海水温、物質の輸送、海の生物たちの分布や移動・回遊に大きな影響を及ぼしている。このような沿岸海域の自然的な特徴によって、地域ごとに変化に富んだ生態系が育まれ、それを基盤とする人々の生活や文化も個性豊かなものにしてきた。沿岸海域における自然的な特徴と人間の歴史的あるいは社会・経済的な特徴の連続性から、九州の沿岸は大まかに16の沿岸に区分されている(図1)。このように、九州の沿岸海域はとても膨大かつ多様であるため、生態系から水産資源、人々の生活・文化に至る全貌をつぶさに見て回ることなど容易ではない。本稿では、九州の沿岸海域で今日共通の課題となっている、気候変動による影響とその取り組みについて、わずかながら紹介したい。

2. 藻場からサンゴの海へ？！

佐賀県の唐津市にある馬渡島付近の海域では、以前から対馬海流によって南方系の魚類が入ってきていたものの、冬の水温には耐えきれず回遊死滅魚となっていた。ところが亜熱帯性のクマノミが2016年頃から越冬するようになり、今ではすっかり定着している。海底はカジメやワカメなどの藻場が消え、サンゴやイソギンチャクが広がってトロピカルカラーの海へと変貌している。40年以上唐津の海を潜り続けてきたベテランダイバーは「このままでは潜水漁で暮らす漁師がいなくなってしまう。」と警鐘を鳴らしている。暖流の影響により西北部の沿岸は九州でも温暖化が早い海域であり、クマノミやサンゴは年々東へと分布域を拡大している。

外海に孤立する対馬も暖流の影響を早くから受け、2010年代中頃から磯焼けに見舞われていたが、一昨年から昨年にかけて、とうとう全島消滅に近い状況に見舞われている。地元漁師によれば、「海水温上昇による海藻類の生育の阻害に加えて、アイゴ、イスズミによる食害の激しさがとくに増している。」という。

福岡県宗像市は海女の発祥の地といわれ、カジメ・クロメ類の藻場での潜水漁が古くから行われてきた。しかし、ここでも磯焼けは深刻であり、「年間2万5千匹以上のウニを駆除しても、ウニが減らない。」と地元漁師は嘆いている。また、ホンダワラ類の一種アカモクは、世界文化遺産となっている宗像大社に8百年以上伝わる古式祭で奉納される重要な海藻である。地域の伝統的な漁業と文化を守るため、市職員と漁業者、地元企業が協働しアカモクの藻場の再生に取り組んでいる。

鹿児島県指宿市の山川町は国内のアマモ自生地の南限付近に位置している。2006 年よりはじめられた漁業者によるアマモ場を再生する活動は功を奏し一時アマモ場の拡大に成功したものの、2018 年頃より再び減少しアマモ自生地は消失してしまった。原因は台風によるかく乱によって種子が消失したことや魚類による食害が専門家により指摘されている。現在は定置網で囲んだ海域にてアマモ場を再生する活動が続けられている。

藻場の減少・消失は九州に限らず全国で直面している課題である。ただ、藻場がサンゴ礁に置き換わるとか、南限のアマモの分布域が消失するといったように、九州の海域は現在、温帯域から亜熱帯域への転換を迎えつつある。今後、生物地理学的なボーダーが北上し生物種や生態系が変化する可能性やその波及効果には未だ不明な部分が多い。さらにいえば影響応答の空間スケールから考えて、地域が個別に対処し解決していくことは難しい局面を迎えている。

3. 海のつながりを実感し、自らもつながり合う

九州地方環境事務所では、昨年 10 月に鹿児島県指宿市にて環境省水・大気局による「令和の里海づくり」モデル事業の実施 6 団体(図2)が集う「気候変動適応の勉強会および九州の里海づくり交流会」を開催した。気候変動適応の勉強会では、水産研究・教育機構・水産技術研究所の山田秀秋氏を講師に迎え、藻場における気候変動の影響と適応策並びにモニタリング手法に関する講演をしていただいた。その後、里海づくり交流会では各団体による口頭およびポスター発表、その後全体でフリーディスカッションを行った。また、座学だけではなく、会場ホストとなっていた山川町漁業協同組合に協力いただき山川小学校体育館で地元漁業者、小学校児童とともにアマモ種子をマットに移植する作業を行った。なお、参加団体は自治体、企業、漁協、NPO 法人など多彩な顔ぶれが集まった。長い時間をともにし、各参加者は打ち解けて SNS のグループが作られた他、次回開催場所として立候補する団体も現れ、交流会は盛況に終えることができた。

交流会で行われたノウハウや情報の交換は、その後も SNS 等を通じて団体間で続けられている。山川町漁協からは皆で作ったアマモマットから順調にアマモの芽が伸びている映像が届いた。それを受けて対馬のアマモの状況もリアルタイムに共有された。また、各団体の活動報告で別の団体のメンバーが参加している様子や、協働の新たな取り組みが進んでいる気配も垣間見られ、団体間をつなぐ試みの成果は得られたと感じている。このつながりが九州の広域モニタリングの体制構築や里海づくりの取り組みのスケールアップへと発展していくことを期待している。

また、私自身は九州における里海の課題は、はたして九州だけの問題なのかということを問うている。くしくも、先日奄美群島に漂着した特徴のあるプラゴミについて、省内のネットワークを頼りに情報収集したところ、九州の全方位と果ては千葉県まで漂流しているらしいことがわかった。島崎藤村の『椰子の実』ではないが海のつながりをあらためて実感した。日向灘沿岸でも確認されていることから、すでに瀬戸内海にも流れ着いているのかも知れない。九州で今日起こることが明日瀬戸内海で起こるかも知れないということを念頭に、防人のごとく、九州内で見聞きし、知り得たことを中国・四国さらには全国へ伝え届けることの重要性を強く感じている。里海づくり推進専門官として、良好な海域環境のために出来ることに取り組みたい。

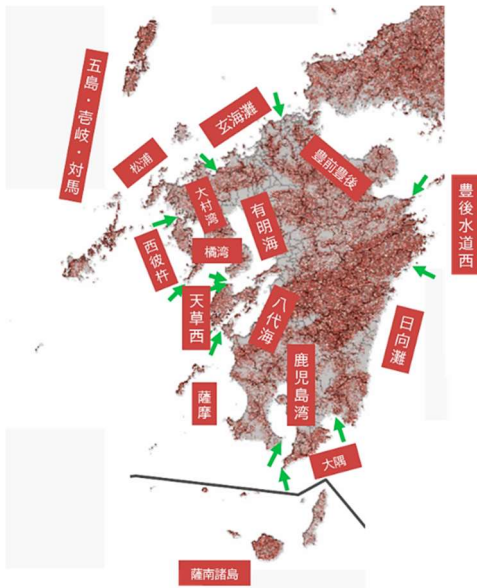


図1 九州における沿岸区分名称

団体名	所在地	事業名
NPO法人 mob対馬自然共生ネットワーク	対馬市	里山・里海の循環回復による藻場再生とエコツアー及び製品の開発
宗像市	宗像市	【宗像ウニプロジェクト】駆除ウニを活用した藻場再生促進・普及啓発プロジェクト
(一社)ふくおかFUN	福岡市	「博多湾里海プロジェクト」～人の営みと自然が調和する海へ～
NPO法人玄海灘を守り育てる会	唐津市	未来に繋げ、体験ツアー実証とモニタリング調査による「ヒト・モノ・資金」の好循環連携体制づくり
肥後銀行	熊本市	八代海沿岸域における産官学金連携による広域的・持続可能なアマモ場再生支援体制構築事業
山川町漁業協同組合	指宿市	山川の海のゆりかご-自足的な漁業経営と環境保全の共生にかかるモデルケース構築

図2 九州における「令和の里海」モデル事業実施団体(令和5年度および6年度)